

第二十六章 スネーク・ライナー

ヨーロッパ・ユーラシア大陸の鉄道網は強力なシールドで守られている。それは鉄道を単なる移動手段としてではなく大量の物流システムと見なしているからである。ソシア軍は国内からウクライナー共和国に向かう鉄道で戦車などを輸送した。そして無差別に市民を攻撃し貴金属はもちろん使用中の家電まで略奪した。ソシア兵にはモラルというものはない。

一方、特急ウク・ライナーは女性や子ども、そして老人を国外に退避させた。だからウクライナー兵は武器さえあれば戦うことに専念できた。

いずれにしてもどの国も鉄道網を重要視する。利用者が少ない路線を廃止するようなことはない。災害の観点から鉄道網の整備は怠らない。大量の救援物資を輸送できるのは鉄道だけである。対して船舶は津波で港湾施設が被害を受ければどうしようもない。

しかし、電力が供給されないとシールドを維持できない。プチレンコン大統領は原子力発電所の占拠を企てたがハリー・マウスに阻止されたので次なる悪知恵を絞り出す。つまり原発からの電力供給を止めて鉄路を守るシールドを無効にすればいいと考えた。併合した領土にも影響が及ぶが元々ソシア領でなかったから無視する。場合によってはソシアから供給すればなんとかなるとも考えた。

戦闘機、ミサイル、戦車を使って鉄道シールド設備にエネルギーを供給する送電線の破壊が始まる。しかし、なかなかうまくいかない。なぜならナイフのような武器があれば送電線を切るのはたやすいが、ミサイルや砲弾で断ち切るのは難しい。つまりハサミであればロープを簡単に切れるがキリで突いても切断するのは難しい。送電鉄塔を破壊する方が簡単だが、送電ネットワークの要の鉄塔を破壊するとソシア本国にも影響が及ぶ。

ところが、この作戦を察知したのか、もちろん誰が察知したのかは不明だが、奇妙な列車が現れる。

*

宇宙戦艦の艦橋で浮遊透過スクリーンを気持ち悪そうにイリが見つめる。

「どう見てもヘビですな。大蛇じゃ」

「ウナギは好きだけどヘビは嫌い！」

長老は意地悪そうな表情に変える。

「黒くすればウナギと変わりませんぞ」

スクリーンに映っているヘビは真っ白だった。驚くほどのスピードで原発にもっとも近い駅を指す。

「あれも特急列車なの？」

長老が変わって加藤が答える。

「そのようです。でも何両編成か分かりません」

「なぜ？」

と言いながらイリは気付く。

「連結器ないからなのね。あんなに長くても一両……」

「そういうことになりませう」

「それに車輪が見えないわ」

「上から見ているからです」

真横からの映像が変わる。それでも車輪は見えない。

「どうせならエラをつけてウナギ・ライナーにすればいいのに」

加藤がイリに微笑みかける。

「白いヘビは吉兆をもたらすと言われていました。いいことが起こるかも」

「で、あればいいわね」

サボリーナ原発の最寄り駅構内からアナウンスが聞こえてくる。

「まもなく特急スネーク・ライナーが到着します。ホームの黄色い線の後ろ側まで下がってお待ちください」

*

サボリーナ原発から伸びる無数の送電線の一部が駅の電気設備に繋がっている。停車してい

たスネーク・ライナーはまるで鎌首を持ち上げるようにその送電線に乗り移る。バチバチと火花が飛び散ると虹色に輝き出す。余りにも強烈な光に何も見えなくなる。イリはサングラスをかけてつぶさに観察する。

「あっ！ 送電線を線路にして走っている！」

元の白い身体に戻ったスネーク・ライナーが細く見える。

「細くなったんじゃない。長くなったんだ！」

榊が驚く。宇宙戦艦の次元カメラがスネーク・ライナーを追跡する。

「何という特急列車じゃ！」

長老も驚く。

「乗客は大丈夫なの？ 感電したかも」

このときイリの心配に答えるように先ほどの駅構内アナウンスが聞こえてくる。

「大丈夫です。乗客全員、スネーク・ライナーを降りて原発冷却用プールの温泉風呂でくつろいでいます」

サボリーナ駅付近には原発を冷却して温水になった人工温泉プールがいくつもある。中には電気風呂もある。結構賑わっている。

「どうということなの」

なぜソシア軍がこのサボリーナ原発を手に入れたかったのか。それは負傷したソシア兵の治

療にこのサボリーナ原発の冷却水がちょうどいい湯加減に暖められて排水されていたからだ。

「温泉か。うまいこと考えたものだ」

元原発所長の加藤が感心する。

負傷したウクライナー兵もソシア兵もここでは仲良く温泉に浸っている。傷に効くだけでなく安らぎも与えてくれる。

さて、スネーク・ライナーは電線を線路にしてひた走る。その速度はあらゆる特急を凌駕する。音速？ その程度の速度ではない。鉄塔がソシア軍に破壊されて電線が寸断されているにもかかわらず、スネーク・ライナーは電線を修復しながら進む。それなのに速度は落ちない。線路脇に配置された電気設備を送電鉄塔代わりにして鉄道網を再びシールドしてこれまで以上に強固な鉄道網を再構築する。同時に空中にも鉄道網を構築するように送電線網を整備する。もちろんこの新たな送電線を線路のように使って走る特急列車はこのスネーク・ライナーをおいて存在しない。ただ、今は送電線の復旧に専念している。いずれは超特急として走り回るだろう。

*

宇宙戦艦の艦橋ではスネーク・ライナーの活躍に歓声が上がる。

「私、ヘビちゃんが好きになったわ」

イリの豹変ぶりに誰も驚かない。歓声が収まるとイリの口癖が始まる。

「でも誰が？」

この疑問は耳が痛いほど聞いているから誰も答ええない。この沈黙にイリがいらつく。
「ノロじゃないのは分かっているわ。じゃあ、誰なの！」

イリが口を尖らす。榊や加藤が黙っているので長老が口を開く。

「ウイルス族じゃ」

「そんなこと百も承知よ。ウイルス族の誰なの。いったいどういう人物なの？」

ついにイリは榊に命令する。

「新疆ウイルス自治領に向かいなさい！」

「そんなことをすれば中華民国が黙っていません」

「中華民国の最高責任者がしゃべろうと黙ろうと関係ないわ。文句言いたいのなら倒れるまでしゃべらせればいい」

中華民国の陸海空軍が束になってかかっても宇宙戦艦はビクともしない。それは中華民国の最高責任者も分かっている。

「そうじゃなくてウイルス族は表に出たくないのです」

加藤が割り込むと長老がイリをいさめる。

「踊りも唄もできない素人を舞台に上げてはダメじゃ」